

常用漢字に対応する漢語“新字形”

— 漢語話者に対する日本語漢字指導 —

上 條 厚

一 始めに

日本語で現在一般に使用する漢字と、中華人民共和国（以下、「大陸」とする）の漢語で一般に使用する漢字の間に違いがあることは、周知のことである。漢語話者が日本語を学習するに際して（逆に日本語話者が漢語を学習する場合も同様であるが）そのことに注意する必要があることも当然である。その違いは大きなことからごくわずかな点までいろいろあるが、ごくわずかの違いのものの中にも、大陸式の書き方が日本で許容される場合もあれば許容されない場合もある。したがって細かい違いにまで目を向ける必要がある。

漢字の違いは大陸におけるもののみならず、台湾人やマレーシアの華人が日常的にする書き方の中にも、——旧字体と新字体の違い以外のことで——日本と違いがあるものがある。そのことには後で少し触れるが、日本語を指導する者が日本と大陸との漢字の違いについてわきまえていれば、台湾人や華人への漢字指導にも役立つであろう。日本語教育の一部分である漢字指導を漢語話者に対して行うという観点から、以下に常用漢字とそれに対応する大陸の漢語の漢字を比較する。

日本と大陸の漢字の違いについて述べた書物・論文は数多い。入手しやすいものの中で、よくまとめて述べられているのを挙げると次のものがある。菱沼1989a, 菱沼1989b, 鈴木1989, 大原1989, 遠藤1986, 香坂1971。菱沼1989a, 鈴木1989は日本語教育に関わることを述べている。日本語教育に関しては富田1965, 林1963もあるが、問題点を指摘しただけのものである。

さてここに挙げた書物・論文は、字体に関する違いを全て尽くしているわけではない。細かい点で述べていないことがある。本稿では、それらに書かれていない微細な違いにも触れることにする。日本語指導者にとっても学習者にとっても、違いを十分に認識しておくことは重要なことである。筆者なりにまとめたものを以下に述べる。

大原1989, 菱沼1989b, 『中日辞典』（商務印書館・小学館）によると、現在大陸で通用している漢字の字体は、1964年に発表の『印刷通用漢字字形表』によっており、その字体は「新字形」と呼ばれているということである。「新字形」の中には簡略されて出来た簡体字が含まれるのはもちろんのこと、簡略されなかった字体も含まれているわけである。本稿においてもその語を用い、「新字形」と表記することにする。筆者は『印刷通用漢字字形表』を未見なので、「新字形」について『新華字典』を拠り所とし、『現代漢語詞典』等の辞典を参考とする。『新華字典』は小型字典で、最も普及したものである。本稿での常用漢字との比較に際して参照した版は、1989年第6版第2刷、日本の東方書店発行のものである。

日本の常用漢字の字体は、1981年、国語審議会答申を受けて内閣から告示された「常用漢字表」に基づいている。本稿で比較に際して参照したのは、『常用漢字表』（大蔵省印刷局1981年三刷）である。

本稿では字体に関することを中心に述べる。意味に関して述べることも必要であるが、制約もあり、それは最小限に留める。

二 本 論

1. 常用漢字で漢語の漢字にないもの（国字）（7字）

日本の国字は、漢語にはなくても当然である。ただし常用漢字の国字で、畑だけは『新華字典』に、畑 tián とあり、日本の姓名用字と説明されている。これは例外的なことである。国字の中で漢語に輸入された有名なものとして、腺 xiàn があるが、これは常用漢字には入っていない。常用漢字の国字を挙げると次のとおりである。（「常用漢字表」での提出順。漢字を一覧で挙げる場合、以下においても同じ）

込働峠畑塀匂杵

この中で働については、注意しておくべきである。労働は漢語では**劳动**（繁体字では**勞動**）であり、字に違いがある。

2. 常用漢字で漢語の漢字に対応するもの

2.1 明朝体が同じもの（692字）

『新華字典』『常用漢字表』は、いずれも明朝体で示されている。したがって明朝体においての異同を比較する。ここでは手書きにおいて許容されるような、細かい違いまで見る。

『新華字典』『現代漢語詞典』や日本で発行されている現代漢語の辞典は、字体が微細な点まで同じになっている（『印刷通用漢字字形表』に基づいて、そのとおりに作っているからと思われる）。また日本語の活字は、数ある中には微細な点での違いは見られるものの、「常用漢字表」（以前においては「当用漢字字体表」）が大本の基準となっている。そこで『新華字典』の“新字体”と「常用漢字表」の字体の違いを徹底的に比較してみることは意義のあることである。なお以後において常用漢字という語を使う場合、「常用漢字表」の字体を指すことがある。

では両者の細かい点での違いとしてどんなものがあるか。線を縦に引いてから斜め右上にはねるものは、常用漢字では丩，“新字形”では丩である。なべぶたは常用漢字𠂇，“新字形”𠂇である。これらは手書きとの関連で見ればどうでもよい性格のものである。日本の明朝体の丩は手書きの場合にはそのように書かず、「丩」のようにするのが普通である。筆で書く場合には「丩」のようにもなるが。これは明朝体と手書きとが相当に違っている例である。なべぶたは手書きでは「𠂇」「𠂇」どちらで書いてもよい。常用漢字と“新字形”のこの違いは、手書きの違いが別々に反映されたものと見るべきである。細かい点の違いにはこうしたものがあるが、詳しくは次の項で見る。

こうした違いを検討した上で、なおかつ明朝体として同じと判断できるものを挙げると、次のとおりである。

胃尉移慰域一芋右羽雨永泳英映易悦援王凹央往押輿横乙卸恩温下火加可何佳果河科架夏荷暇歌我介回快戒怪界械涯街垣各革格学瀉括活且株刈干刊甘汗肝冠看患款感憾丸企危机

希忌汽奇季起基喜期棋技欺疑菊吉九久丘旧休求救球牛居虚御共狂供挟狭恐恭教凝曲局
 玉斤均近金菌筋禁句苦愚偶遇隅君郡群兄刑形型敬憇血月犬件建研兼健猷遣元源源己古呼
 固故枯湖鼓五午悟口工孔功甲光向后江行孝攻更幸拘肯侯厚恒洪皇香候耕黄硬衡合克告谷
 国左佐再裁彩祭菜在材作削昨策札刷皿三散算士子止仕史矢旨死伺志使刺枝肢思指脂嗣
 示寺次自事侍持式七失湿漆者赦斜煮勺尺借若手主朱首殊珠受授需儒周拾秋愁十汁住柔
 重叔淑旬巡盾殉循暑署助叙徐除小升召肖尚招承沼昭消笑唱掌晶硝照上丈冗状城常情蒸色
 囑心申伸身侵津浸森人仁尽迅水吹垂炊遂睡随据杉寸是井正生成声制征性青政星牲逝清盛
 晴精静整税夕斥石赤昔析惜籍折雪舌千川占先泉洗染栓潜全前善然阻租措粗双壮早争走相
 草送柔曹葬想遭槽操燥霜藻造束足促息速俗属存村他多打堕惰太体耐待速替大代第卓拓但
 脱棚丹担胆短男断暖地池知竹逐秩茶中仲虫忠抽注昼柱著丁兆挑挑朝超跳潮澄珍珠追通坪
 呈廷弟堤提程泥的笛哲典点斗斗吐徒途都土刀冬灯当豆逃桃党悼盗塔搭登答等筇踣同洞胴
 堂道特得督独凸屈豚内南二尼肉日乳尿任年粘燃把波破杯背白伯拍泊迫麦漠爆筋肌八伐半
 犯帆伴畔班藩番皮否彼披肥秘尾美必泌百票漂苗描猫品不夫父付布扶拂附赴浮符普武封伏
 服副幅腹覆沸物粉分丙平兵柄弊米片便保捕浦母募墓慕暮邦某暴膨北木朴牧本奔翻凡盆枚
 埋幕膜又末抹万慢漫未味矛名明盟面茂模毛耗猛目野厄由油愉友有悠予余用洋洋踊浴欲
 冀来雷落乱吏利里理履律略了料量僚力林厘励例烈烈路露老漏和惑

据は、漢語では據の簡体字として使われるが、據は日本の新字体では、拠であり、別の字である。さて漢語にも、簡体字ではない据の字がもともとあるが、その意味は「手が仕事で疲れる」（『熊野中国語大辞典』）であり、これは日本語の「据える」と意味上の関連が薄い。菱沼1989aは「日本の『据』は中国には対応する符号がなく国字に近い」としている。ただし本稿では、漢語にあるものであるから、漢語の漢字として扱っておく。

机は漢語では機の簡体字として使われる。ただし簡体字でない机も、もともと漢語にある。卓は漢語では、高い、優れた、の意味でのみ用いる。漢語で机の意味を表すのは桌である。北については、明朝体では問題がないが、手書きにおいては日本と大陸で違いがある。日本では「北」のように書くのが一般的であるが、大陸では手書きでも明朝体と同じに「北」と書く。字の中に北を含んだ背・乗（“新字形”は日本の旧字体と同じ）も同様に書く。大陸からの留学生に確かめたところ、全員が同じ答えであった。では大陸以外の漢語ではどうか。台湾人留学生4人と、中華系マレーシア人留学生9人に、北の書き方を尋ねた結果では、次のようになった。日本と同じ人、台湾人2人、マレーシア人4人であり、他の人は皆「北」のように書くということであった。「北」「北」のように書いても日本で通用はするが、違いに注意しておくべきであろう。

2. 明朝体に違いがあるが手書きでは問題とならないもの（440字）

前項で明朝体での違いに触れた。違いを2種類に分けて次に挙げる。

明朝体では違いが手書きが同じになるものは、次のとおりである。上段が違いの例。下段は漢字例。左側、常用漢字、右側、“新字形”。（対照させて挙げる場合は、以下同じ）

レ-レ ㄥ-ㄥ ㄌ-ㄌ ㄩ-ㄩ ㄩ-ㄩ
 氏-氏 去-去 山-山 幻-幻 系-系

これらはいずれも斜めまたは直角に折り曲げ、その部分を続けて書くものである。

次に手書き上の違いが常用漢字と“新字形”で、明朝体に別々に反映されていると見るべ

きのものは、次のとおりである。

- | | | | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| ① | ㄆ-ㄆ | ㄋ-ㄋ | ㄌ-ㄌ | ㄌ-ㄌ | ㄌ-ㄌ | ㄏ-ㄏ | ㄏ-ㄏ |
| | 文-文 | 因-因 | 亡-亡 | 望-望 | 改-改 | 空-空 | 没-没 |
| | ハ-ハ | ヒ-ヒ | 丨-丨 | 丨-丨 | ㄅ-ㄅ | | |
| | 沿-沿 | 化-化 | 判-判 | 派-派 | 考-考 | | |
| ② | 今-今 | 令-令 | 戸-戸 | 非-非 | 舟-舟 | 天-天 | 凶-凶 |
| | 含-含 | 冷-冷 | 肩-肩 | 悲-悲 | 船-船 | 蚕-蚕 | 胸-胸 |
| | 佳-佳 | | | | | | |
| | 集-集 | | | | | | |
| ③ | 寿-寿 | 入-入 | 耳-耳 | 司-司 | | | |
| ④ | 身-身 | 耳-耳 | 木-木 | | | | |
| | 射-射 | 取-取 | 条-条 | | | | |
| ⑤ | 瞿-瞿 | | | | | | |
| | 曜-曜 | | | | | | |

①は字の一部分としての場合である。ㄆでの点はㄆ・ㄆ等の場合も同様である。②はそれだけで字となり、また別の字の部分ともなる場合である。ただし佳は常用漢字ではない。凶は縦の線の長さの違いである。③はこの字のみについてこうなるものである。“新字形”の寿は他の字の部分ともなるが、常用漢字には寿を部分として含んだものがない。耳-耳は他の字の部分となるときは④のようになる。司-司は1画目の横の長さだけの問題である。同のように他の字の部分となった場合には目立たないので、常用漢字と同じとした。④はそれだけで字となれるものが、別の字の部分となる場合である。木は他には、新-新などの場合に上記のようになる。

以上のことが一字の中で幾つか該当する場合もある。これらのことを検討した上で、手書きで問題とならない違いと判断されるものは、次のとおりである。“新字形”は省略して挙げる。

哀握扱安案暗衣位医依委威意育引因姻院宇影疫益液越沿炎宴猿演欧毆翁屋音化花家嫁靴寡稼蚊会改皆外効核郭岳完官勘寒堪棺管含岸岩眼祈寄旗宜却客脚逆及弓吸朽究泣去凶京享峡胸境仰琴襟吟区空屈掘系景携警迎激穴肩嫌幻玄言弦限戸雇互公巧交好考坑抗荒郊校航高康控慌酵稿号拷豪刻酷今因昆恨根婚混砂唆座妻宰最裁催罪崎索酢察撮擦山参蚕惨酸氏司四市至私始祉姿施紫雌字耳治滋慈辞磁室疾芝社射遮蛇酌爵弱寂守取狩酒趣寿囚舟秀宗就集酬充祝宿塾熟出俊准遵初庶女如序匠床松宵症祥商章焦彰障礁条食辱辛信神唇娠振深寝新震薪甚衰推枢崇数世西姓婿誓席切拙窃接仙宣扇旋船祖素塑装即族卒率尊妥怠胎退袋台宅濯探深端段致痴稚畜蓄窒嫡宙衷痛定亭帝庭停艇摘漓迭撒天店展殿渡奴努度怒投到倒透陶痘童置入妊念能派婆肺俳配排倍培陪媒舶判般搬比妃批非疲被悲扉避匹表俵病府富腐部福文陞壁癖偏遍方芳宝放法峰崩褒亡乏忙坊妨忘防房肪剖望傍没堀麻磨妹岬妙民眠娘迷妄盲夜役唯幽裕雄誉幼要容庸溶腰曜抑翌裸酪卵痢立柳流留粒疏旅良陵寮累令礼冷零裂廉炉郎朗浪廊楼六腕

以上の中で炎は、上の火の右払いについて、「常用漢字表」では——放す、となっているのに対し、“新字形”は——止める、となっている。その違いである。淡など炎を含む他の

字も同様である。因については、恩のように別の字の一部となったときには、常用漢字も“新字形”も右払いを止めるので、その場合には同じとなる。

猿はしの違いがあるためにここの一覧に入っている。“新字形”でもそこをはねるが、常用漢字ではねていることは注目すべきである。袁を字に含む常用漢字でそこをはねているのは、猿だけである。派・旅を含めて𠂔の形を含んだ常用漢字で下をはねているのは猿だけである。

し下の形を含んだ字でここの一覧に出ていないものがあるが、それは後で扱う中に入っている。

上掲の中で、扱は『新華字典』『現代漢語詞典』いずれにも載っていない。その字体については『辭源 修訂本1-4』によって見た。『辭源 修訂本1-4』は繁体字で印刷されているが、旧来の日本と同じ形式の明朝体ではなく、細かい点でのやり方を『新華字典』『現代漢語詞典』と同じようにしているものである。

堀は、『現代漢語詞典』には載っているが、『新華字典』には載っていない。扱や堀は、漢語ではめったに使われないものようである。菱沼1989aは扱について「現代中国語ではまったく使われない」としている。

2.3 “新字形”が日本の旧字体の一つであるもの、およびそれに準ずるもの(108字)

これ以後においては、前項で見た手書きで問題にならない違いについて、違いとは扱わないこととして話しを進める。

この項で「旧字体の一つ」としたのは、一つの漢字について旧字体が一つだけとは限らないからである。例えば、強は旧字体として強と強の両方があり、窓の旧字体は、窓・窗・窻の三つあるという具合にである。

“新字形”が日本の旧字体であるものを、分類した上で以下に挙げる。同類をまとめ、その内部では「常用漢字表」の提出順とする。(以下でも同じ)

- | | | | | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| ① | 壹—壹 | 假—假 | 罐—罐 | 欠—缺 | 効—效 | 勅—敕 | 窓—窗 | 霸—霸 |
| | 拜—拜 | 拊—拂 | 仏—佛 | | | | | |
| ② | 灰—灰 | 炭—炭 | 悔—悔 | 海—海 | 毒—毒 | 梅—梅 | 繁—繁 | 敏—敏 |
| | 侮—侮 | 每—每 | 害—害 | 割—割 | 契—契 | 唐—唐 | 糖—糖 | 喝—喝 |
| | 渴—渴 | 褐—褐 | 掲—掲 | 器—器 | 臭—臭 | 突—突 | 戾—戾 | 虐—虐 |
| | 強—強 | 勤—勤 | 具—具 | 恵—恵 | 穂—穂 | 港—港 | 包—包 | 抱—抱 |
| | 泡—泡 | 胞—胞 | 黒—黒 | 墨—墨 | 黙—黙 | 碎—碎 | 粹—粹 | 醉—醉 |
| | 冊—冊 | 舍—舍 | 収—收 | 所—所 | 乘—乘 | 剩—剩 | 壤—壤 | 刃—刃 |
| | 忍—忍 | 搜—搜 | 挿—挿 | 巢—巢 | 蔵—藏 | 町—町 | 德—德 | 博—博 |
| | 薄—薄 | 敷—敷 | 簿—簿 | 坂—坂 | 板—板 | 版—版 | 微—微 | 鼻—鼻 |
| | 姫—姫 | 冒—冒 | 帽—帽 | 勇—勇 | 隆—隆 | | | |
| ③ | 晚—晚 | 勉—勉 | 免—免 | 卑—卑 | 碑—碑 | 延—延 | 臣—臣 | 芽—芽 |
| | 雅—雅 | 邪—邪 | 降—降 | 舞—舞 | 叫—叫 | 孤—孤 | 孤—孤 | |

①は旧字体と新字体が相当に違っている場合である。①以外は違いが少しの場合である。

②は旧字体と新字体の画数が同じか、旧字体の方が画数が少し多いものである。③は旧字体の方が1画少ないものである。この中の旧字体について述べると、晚以下の5字は、四角の

中の縦線とその下の左払いを続けて書くもの、延以下の10字は、縦線から横線に続く部分を1画で書くものである。

次に“新字形”が旧字体の明朝体と少し違ってはいるが、それでも旧字体であるもの、またそれに準ずると言えるものを挙げる。新字体、旧字体、“新字形”の順。

- ④ 溪－溪－溪 瞬－瞬－瞬 稻－稻－稻 僧－僧－僧 増－増－増
 憎－憎－憎 拔－拔－拔 陥－陥－陥
- ⑤ 逸－逸－逸 返－返－返
- ⑥ 慨－慨・慨－慨 概－概・概－概 既－既・既－既

④については、旧字体の明朝体は上記のとおりであるが、手書きのときには上掲の“新字形”のような書き方で書くことが多かったものである。この手書きの形も旧字体と考えるべきである。⑤はしんにょうの部分で違いがある。しんにょうは明朝体と手書きとが違っているものである。明朝体においてそれぞれに違いがあっても、手書きにおいては同じになる。“新字形”のような形も旧字体と考えるべきである。⑥の新字体と“新字形”の違いは、无の部分の縦線から横線に続くところを、“新字形”では1画に書くことである。これは旧字体のやり方と同じである。これらの旧字体の明朝体は上記のとおりであるが、手書きのときには“新字形”と同じように書くこともあった。したがってこれは、旧字体とは言えないとしても、それに準ずるものと言うべきである。なお旧字体は現在でも日本で通用すると考えるべきものである。

2. 4 ここまでに未出で常用漢字と“新字形”に少し違いがあるもの

2. 4. 1 日本でも通用すると判断するもの(20字)

通用するとしたのは筆者の判断である。常用漢字と“新字形”を対照させて挙げると、次のとおりである。

拐－拐 別－別 解－解 角－角 触－触 券－券 春－春 奏－奏
 泰－泰 奉－奉 俸－俸 棒－棒 卷－卷 圈－圈 查－查 真－真
 慎－慎 添－添 屯－屯 与－与

このうち卷と圈は2箇所の違いがある。添と屯は上側の画をどう書くかの違いである。これは風の中の虫の上の画をどう書くかという違いと同じだと考えれば、手書き上の違いということになるが、違いがきわだったものであるので、ここに挙げた。さてこれらの“新字形”は、同様の書き方が日本でもされた(あるいはされている)ものである。したがって日本でも通用すると筆者は判断する。ただしそれが試験で正答とされるかどうかは、別問題である。

なお春の書き方について、前出の4人の台湾人と9人のマレーシア人にした質問では、全員が大陸と同じ書き方という答えであった。ただし台湾の出版物では、明朝体は日本と同じ、楷書体の活字で散見するものでは、大陸と同じになっている。大陸では前出の繁体字による『辞源 修訂本1－4』の活字においても、“新字形”と同じになっている。

2. 4. 2 日本では通用しない違いのもの(67字)

これについて次の二つに分類して挙げる。ただしこの二つは程度の違いであり、境界がはっきりしているわけではない。

違いが目立たないもの

以-以	似-似	瓶-瓶	印-印	巨-巨	拒-拒	距-距	鬼-鬼
魂-魂	魔-魔	魅-魅	象-象	像-像	差-差	着-着	才-才
写-写	修-修	述-述	少-少	抄-抄	省-省	秒-秒	劣-劣
称-称	反-反	蚤-蚤	恋-恋	湾-湾			

以を含めた最初の四つは、縦の線から斜めあるいは横の線に移る所を、常用漢字では一旦離して2画に書くが、“新字形”では1画に続けるものである。鬼以下の八つは、縦の線と左払いの所を、常用漢字では続けないが、“新字形”では続けるものである。少以下の四つは、縦線を常用漢字でははねるが、“新字形”でははねないものである。蚤以下の三つも、はねるかはねないかの違いである。反は1画目をどう書くかの違いである。反を字の一部として含む坂・板・版・返・販・飯については反を反とした形での旧字体の使用例が見られるが、反だけの場合には明朝体ではそうしたものが見当たらない。手書きでは見られないこともないが、普通ではない。

違いの分かりやすいもの

压-压	隠-隠	穩-穩	汚-汚	画-画	隔-隔	融-融	滑-滑
骨-骨	髓-髓	敢-敢	況-況	決-決	減-減	淨-淨	沖-沖
涼-涼	涉-涉	步-步	植-植	殖-殖	值-值	置-置	直-直
禅-禅	单-单	彈-彈	对-对	带-带	滞-滞	厅-厅	低-低
底-底	抵-抵	邸-邸	辺-辺	変-変	揺-揺		

この中で髓については、骨の部分を変えただけだと旧字体になるものであるから、その点の注意も必要である。揺については、違いを見落としやすいが、ノがあるかないかである。

字として正確なものとなるためには、一画一画が重要である。また許容できる部分と許容できない部分がある。ここに挙げた“新字形”は日本では通用しないと考える。

2. 5 常用漢字と“新字形”が大幅に違うもの

それ相応の書き換えが必要である。以下において簡体字を常用漢字に変換する方式を考えるが、それは全て常用漢字の範囲内で考える。常用漢字以外をも扱う場合には以下とは別のことも考えられることを断っておく。

2. 5. 1 “新字形”の構成部分を方式に従って一律変換すれば常用漢字が得られるもの(281字)

以下のものがそうである。→のように変換すればよい。下線があるのは重出であり、2回変える必要のあるものである。

讠→言	課該記議詰許訓計謙語誤獄詐詞試詩謝諸訟詔証詳診誠請設說訴諾談調訂討誅罰評譜訪謀訊論誘論話				
饣→食	飲餓館飢飼飾	广→広	扌→広	冂→門	闕閣閭閑簡潤閭閉門問
纟→糸	維緯綵緩紀級給繰經繼結絹紅絞綱紺細紙終縱縮緒紹紳績絕繕組統締統納紛編縫紡綿紋約絡緑				
马→馬	馱騎驅驗駐篤馬	义→義	義儀議	彳→易	場腸湯揚
韦→韋	偉違韃	车→車	較軌揮輝軍輕軒庫載暫軸車陣漸軟輦輸輪連		
贝→貝	遺貝貨賀貝貫慣貴賢貢鎖債財資賜賞責續則側測賊損貸賃潰貞偵敗賠費貧負賦噴債賈賄				

见→見 覚寛規見現視 为→為 為偽 𠂔→𠂔 緊堅賢 冈→岡 綱鋼剛
 从→從 從縱 倉→倉 倉創 隊→隊 隊墜 长→長 長帳張脹
 仑→侖 倫輪論 𠂔→𠂔 銳鉛鏡銀鑷鎖錯銃錠針錘錢銑鍛鑄鈞鉄銅鉢銘鈴
 鳥→鳥 鳥鳴 𠂔→尺 馱积沢沢沢 𠂔→𠂔 徑莖莖莖
 戈→戈 棧殘浅踐錢 东→東 陳東凍棟 𠂔→𠂔 務霧
 頁→頁 額頑顔傾項順題頂煩頌預頌 亚→亜 亜悪 呂→呂 宮
 乔→喬 橋矯 齐→齊 濟劑齊 𠂔→𠂔 惱腦 农→農 農濃
 吳→吳 虞吳娛誤 𠂔→𠂔 渦禍 兔→兔 喚換 尧→堯 曉燒
 金→金 儉劍險檢驗 兩→兩 滿兩 𠂔→𠂔 齒齡 魚→魚 魚漁鯨鯨
 卖→売 統誼売 征→徵 徵懲

征は常用漢字にある字である。“新字形”の征は、常用漢字では征・徴の両方に当たるわけである。こうした1対2の対応を持つものは他にもあるが、ここでは触れない。

2. 5. 2 前項に準じて考えればよいもの (101字)

次のものは構成部分を一律に変換するのではなく、一部分の字においてのみ変換するものである。例えば、乙の変換については、乙という“新字形”の字は常用漢字の意に対応するわけではないから、それは変換しない。他の該当する亿・忆だけを変換する。なお以下で、又・不・𠂔は二つのものに対応している。また波線のものは前項での変換と組み合わせてするものである。

乙→意 億憶	卜→𠂔 僕撲	几→幾 幾機	又→𠂔 勸飲觀權
又→莫 漢嘆難	リ→𠂔 師帥	𠂔→幸 執報	𠂔→𠂔 勢熟
𠂔→𠂔 掃掃婦	云→雲 雲曇	不→𠂔 壞懷	不→景 還環
勾→𠂔 溝構購	𠂔→云 𠂔伝	龙→竜 滝竜	只→𠂔 識織職
发→発 麩発	𠂔→𠂔 壘懇	𠂔→𠂔 榮鶯蚩勞	舌→商 適敵
元→袁 園遠			

上の中で、发は髪にも対応しているものである。

次は変換の方法に少し注意が必要なものである。ただし監以下の三つは、それらだけにおいては一変換でよいものである。

協-協	脅-脇				
監-監	覧-覧	濫-濫	鑑-鑑	臨-臨	
県-县	懸-懸	将-将	奨-奨	憂-忧	優-优

次はこれまでに出来た変換に加えて、別の変換が必要なものである。

鷄-鸡	願-願	鉦-𠂔	講-讲	鐘-钟	讓-让	繩-绳	線-线
織-纤	貯-貯	認-認	練-练	鍊-炼			

練・鍊の 东→東 という点は共通している。

次は前項の変換方式で変換した場合、旧字体（それに準ずるものを含む）になるものである。新字体、旧字体、“新字形”の順にあげる。

謁-謁-謁	円-圓-園	縁-縁-縁	桜-櫻-櫻	轄-轄-轄
糾-糾-糾	誕-誕-誕	謹-謹-謹	贊-贊-贊	貳-貳-貳
縛-縛-縛	販-販-販			

瀬－瀨－瀨 頼－頼－頼 贈－贈－贈 飯－飯－飯 飽－飽－飽

最後の行の5字は前項の変換方式で変換しただけの場合、旧字体の明朝体と少し違うものになる。贈については、同じ部分を含んだ別の字についてすでに述べた。しょくへんは旧字体の明朝体では𠂔であるが、手書きのときには𠂔のようにするのが普通であった。その書き方でも旧字体と言うべきである。頼の右側部分の旧字体の明朝体は頁であるが、手書きでは負とすることもあった。これは旧字体に準ずるものと考えべきである。

次は前項の変換方式で変換した場合、常用漢字と少し違いがあるものになる場合である。

純－純 鈍－鈍 騷－騷 馱－馱 鎮－鎮 騰－騰 頻－頻 謠－謠

騷は、蚤の部分に常用漢字にはない点の一つがある。また旧字体の騷より点が一つ少ない。

馱は点がない。これらは注意が必要である。他のものについては、同じ部分を含んだ別の字について、注意すべき点をすでに述べた。

2. 5. 3 “新字形”に別の構成要素等を加える必要があるもの(67字)

2. 5. 3. 1 別の構成要素等を加えれば常用漢字になるもの

ここでは手書き上の違いに関わる細かい点は、自動的に変えるものとして考える。

へんを加えるもの。

競－竞 係－系 誇－夸 採－采 誌－志 諮－咨 復－复 復－复
併－并 隸－隶 録－录

つくりの部分を加えるもの。

殼－壳 掛－挂 郷－乡 顯－显 殺－杀 雜－杂 親－亲 畝－亩
倣－仿 離－离 類－类

かんむりの部分を加えるもの。

菓－果 兒－儿 昇－升

あしの部分を加えるもの。

業－业 製－制 築－筑 塗－涂

囲む部分を加えるもの。

癒－愈 週－周 開－开 関－关 裏－里

囲まれた部分を加えるもの。

氣－气 産－产 飛－飞

字の真中に加えるもの、およびそれに準ずるもの。

尋－寻 奪－夺 寧－宁 奮－奋 虜－虏 慮－虑 傘－伞 肅－肃

右上または右下に加えるもの。

際－际 時－时 孫－孙 濁－浊 盤－盘 標－标 陽－阳

その他のもの。

幹－干 啓－启 繭－茧 習－习 滅－灭

2. 5. 3. 2 別の構成要素等を加えさらに改編が必要なもの。

塚－冢 捨－舍 膳－饕 獸－兽 薰－熏 電－电 準－准 麗－丽
術－术 様－样

2. 5. 4 構成部分が共通し、他の部分を変える必要があるもの(115字)

へんが同じもの。

陰-阴	韻-韵	煙-烟	価-价	階-阶	塊-块	確-确	嚇-吓
艦-舰	擬-拟	儀-牺	喫-吃	扱-据	極-极	潔-洁	姉-姊
種-种	勝-胜	嬢-娘	醸-酿	積-积	疎-疏	礎-础	臟-脏
壇-坛	恥-耻	彫-雕	沈-沉	徹-彻	墳-坟	補-补	脈-脉
躍-跃	猶-犹	擁-拥	欄-栏	陸-陆	獵-猎	糧-粮	淚-泪

つくりの部分と同じもの。

詠-咏	岐-歧	戲-戏	劇-剧	搾-榨	跡-迹	戦-战	託-托
動-动	舗-铺	郵-邮	遊-游	砲-炮			

砲はへんを変えただけでは旧字体であるので、さらに変更が必要がある。

かんむりの部分と同じもの。

愛-爱	棄-弃	窮-穷	挙-举	芸-艺	憲-宪	斎-斋	実-实
審-审	罷-罢	筆-笔	賓-宾	薬-药	窯-窑	羅-罗	

あしの部分と同じもの。

興-兴	災-灾	璽-玺	襲-袭	疊-叠	態-态	導-导	雰-氛
幣-币	壘-垒						

たれが同じもの。

応-应	慶-庆	薦-荐	層-层	療-疗	曆-历	歴-历	
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	--

しょうが同じもの。

運-运	過-过	処-处	進-进	遷-迁	選-选	達-达	遲-迟
通-递							

かまえの部分と同じもの。

囿-围	樹-树	囿-图	団-团	風-风			
-----	-----	-----	-----	-----	--	--	--

二つの部分と同じもの。

傷-伤	償-偿	撰-撰	浹-涇	浜-滨			
-----	-----	-----	-----	-----	--	--	--

常用漢字の浜は“新字形”からさらに省いた形である。なお“新字形”の中に浜と同形のものがあり、別の意味である。

その他のもの。

塩-盐	獲-获	穫-获	願-愿	勳-勋	碁-棋	節-节	喪-丧
範-范	氷-冰	隣-邻					

2. 5. 5 全面的に書き換える必要があるもの (47字)

残りのもの全部である。

異-异	衛-卫	華-华	箇-个	楽-乐	乾-干	響-响	驚-惊
擊-击	傑-杰	敝-严	個-个	後-后	護-护	穀-谷	歳-岁
咲-笑	糸-丝	質-质	衆-众	醜-丑	書-书	粧-妆	衝-冲
聖-圣	隻-只	專-专	莊-庄	総-总	弔-吊	聽-听	島-岛
頭-头	鬪-斗	買-买	髮-发	備-备	膚-肤	並-并	弁-辨
豊-丰	無-无	夢-梦	網-网	葉-叶	養-养	靈-灵	辨-辨

この中で无・备など、構成部分として他の字にも使われるものがあるが、常用漢字では一つしか該当するものがないので、この項目に挙げた。

弁は“新字形”の办と混同して用いられることがあり、「合弁」「買弁」がその例であるが、本来別のものである。

三 終わりに

以上のように整理をした上で漢語話者の学生に対処すれば、より効果的な指導ができるであろう。

さて本稿で春などの字の違いについても述べたが、そういうことは前掲の参考文献のいずれも言及していない。『中日大辞典』（愛知大学中日大辞典編纂処編・大修館書店1968年初版、1988年増訂第二版）は巻末に「日中字形対照表」を載せている。この種の対照としては最大のものであろう。その中に春の字形と関係あるものとしては卷・圈が載っているが、春は出ていない。卷・圈が出ているのは凡の違いを示すためのように思われる。

春の字の右払いの画をどこから書き始めるかについては、日本の学校ではよく指導されていることである。漢語話者の留学生の中には「春」のように書く人もいる。そうした書き方に日本人はどうしても違和感を覚えるであろう。逆に日本語のような書き方に、漢語話者は違和感を覚えているかもしれない。

漢字の違いをよくわきまえた上での指導は重要である。

参考辞典類

- 『常用漢字表』大蔵省印刷局 1981年三刷
 『中日辞典』商務印書館・小学館 1992年初版
 『新華字典』商務印書館 1957年第1版、1988年新訂第6版
 『中日大辞典』愛知大学中日大辞典編纂処編・大修館書店 1968年初版、1988年増訂第二版
 『熊野中国語大辞典』熊野正平編・三省堂 1985年
 『現代漢語詞典』商務印書館 1978年第1版、1983年第2版
 『辭源 修訂本1—4』商務印書館 1979～83年 修訂第1版

参考文献

- 菱沼 透 1989a「漢字の用い方（中国語との対照）」『講座日本語と日本語教育9』明治書院
 菱沼 透 1989b「中国の漢字と常用漢字」『漢字講座11漢字と国語問題』明治書院
 鈴木義昭 1989「中国の簡体字」『講座日本語と日本語教育9』
 大原信一 1989『新・漢字のうつりかわり』東方選書
 遠藤紹徳 1986『早わかり中国簡体字』国書刊行会
 香坂順一 1971『中国語研究学習双書①中国語学の基礎知識』光生館
 富田隆行 1965「中国語と日本語——中国語と日本語の漢字は同じではない」『日本語教育』7号
 林 米子 1963「中国語と日本語教育」『日本語教育』2号

信州大学教育学部

助教授 上 條 厚